



明治45(1912)3月卒業生(中11回卒)の記念写真。前より3列目・右側より5人目が、本校校歌を作詞した堀越晋先輩。右上の写真は堀越先輩を拡大したもの。(『進修』16号より転載)

→  
進修同窓会創立25周年記念事業として、昭和38年に建設された旧本館玄関前の「校歌碑」



## 校歌「沃野一望」

100年余にわたって歌い続けられてきた校歌。制定は1911(明治44)年、作詞は堀越晋先輩(中11回卒・当時土浦中学校第4学年)、作曲・補筆が尾崎楠馬先生(高知県出身、国漢科主任、のち1922〔大正11〕年~1942〔昭和17〕年までの20年間は静岡県立見附中学校〔現静岡県立磐田南高等学校〕校長)。今号から校歌の一節一節にかかわることについて考えていきます。

## 焦点距離

同窓会を開くたびに、校歌のことが話題になります。そこで分かったことは、小学校・中学校・高校・大学、それぞれの校歌のなかで、私たちの誰もが一番良いと認めているのが、「土浦一高(土浦中学)校歌」。「沃野一望」が一番馴染んでいるということでした。著名な詩人や作曲家の手による校歌もありますが、やはり「♪沃野一望」だと言うのです。一中学生の作詞、一教師の作曲・補筆の校歌が何故これほどまでに印象深いのでしょうか。

神戸女学院大学名誉教授内田樹氏(専門はフランス現代思想、映画論、武道論など多岐にわたっています)は『街場の文体論』(ミシマ社)の中で、「一流の作家は例外なしに説明がうまい。橋本治さんは説明がうまい。三島由紀夫もうまい。村上春樹もうまい。『説明のうまい作家』というのとつきにこの3人の名前が浮かぶくらいですから、説明という能力が作家的才能の本質的なところにかかわるといえることは、皆さんにもおわかりいただけると思います。

説明がうまい人って、友だちの中にもいるでしょう。ものごとの本質をおおづかみにとらえて、核心的なところをつかみだして、それを適切な言葉でびしりと言い当てることのできる。

どうしてそういうことができるのか。技術的な言い方をすると、焦点距離の調整が自在だからなんです。はるか遠い視点から航空写真で見おろすようなしかたで対象を見たかと思うと、いきなり皮膚のでこぼこを拡大鏡でのぞくように近づ



関八州の重鎮として威風堂々とそそり立つ筑波山(上)。筑波山系から俯瞰し、写真右上に見える霞ヶ浦(右)

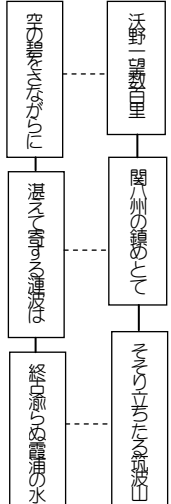
く」と述べています。

さらに、同氏は、一例として橋本治『パベルの塔』の一文をあげ、「この文章を読んだだけでは、『橋本さんは説明がうまい』ということの意味が皆さんにはまだぴんとこないかもしれないですけれど、物語るときの焦点距離の移動が恐ろしく速いということはおわかりになると思います。」と続けています。また、三島由紀夫の『豊饒の海』の第3部『暁の寺』、村上春樹の『1Q84』を例にあげて、「説明のうまい作家に共通するのは、遠くから、巨視的・一望俯瞰的に見たかと思うと、一気に微視的に、顕微鏡的な距離にまでカメラ・アイが接近する、この焦点距離の行き来の自在さです」と、くり返し述べています。

## 一望俯瞰、眼前、心の内、未来へ

「沃野一望」の校歌、この焦点距離の調整という視点で味わってみると、内田氏が挙げた3人の作家に匹敵するくらい自在なものがあります。

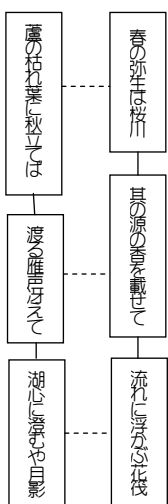
## 一番



まず巨視的・一望俯瞰的に、筑波山から霞ヶ浦へと視点が移り、その豊かさや雄大さが詠われるとともに、堀越先輩の母校への思いも感じとれます。

在校生や卒業生、誰もが母校の発展を期待しています。母校が、筑波山のように天下に冠たる学校に育ってほしいと思っています。しかし、心の底には「母校は変(渝)わらないでほしい」との思いがあることも事実です。それは母校の発展を否定するものではありません。時が遷り、校舎が新しくなり、教育内容が変わろうとも、懐かしい母校には自分が生徒だったときと同じ空気が漂っている。そこに学んだ者は、それを無意識のうちに切望しているのです。堀越先輩は、こうした思いを筑波山(「そそり立ちたり筑波山」と霞ヶ浦(「終古流らぬ霞浦の水」)に込めています。

## 二番



ここでは一気に眼前の風景に焦点が移り、春の桜川と秋の霞ヶ浦、花の香と鳥の声、風に散り川面を流れゆく桜花と湖面に映る月の影を対比させて、花鳥風月、郷土の美しい自然を描いています。陽春に浮き立つ若人の心と、晩秋にも思ふ青年の心までもが伝わってくるようです。

二番

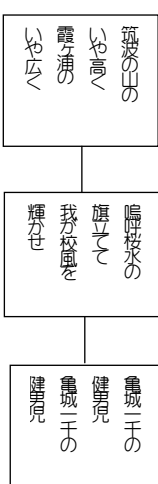
此の山水の美を享けて  
我に寛雅の度量あり

此の素麗の気を享けて  
我に至誠の心あり

東国児の血を享けて  
我に武勇の気魄あり

さらに内視鏡的な距離にまでカメラ・アイが接近し、土中生の心の内に入っていきます。天地自然の恵み、先人のDNAを享け(享受)、自分たちに宿っている「寛雅の度量」、「至誠の心」、「武勇の気魄」。「寛雅の度量」、「至誠の心」いづれも、他に対する心掛けですから、当然「武勇の気魄」も、他のために、不正を正し、苦難に打ち勝つ気魄であることは言うまでもありません。

四番



土中生の内面から、一気に未来へと焦点が移ります。それも自分たち(作詞当時の在校生たち)の未来だけではなく、永遠に続いていくであろう母校の後輩たちへのエールともなっています。そして、そのエールも筑波山と霞ヶ浦に託して送られています。

私たちは「寛雅の度量」、「至誠の心」、「武勇の気魄」を天賦の資質としてこの身に授与されています。だからこそ、土中生や一高生の一人ひとりが、「筑波の山のいや高く」、理想や真理を探索し、それを「霞ヶ浦のいや広く」、世界の隅々

除幕式に際し、校歌碑に、礼深される尾崎先生令夫人芳様



除幕式に際し、校歌碑に参列していた堀越晋先生(左)と堀越晋一ご夫妻(右端)先生令夫人芳様(昭和38年10月20日)

にまで及ぼしていく使命を背負っているのです。「上求菩提、下化衆生」、真理(悟り)を求めて精進努力し、その学びの成果を衆生(世界の人々、生きとし生けるものすべて)におよぼしていきなさい、とのエールです。この真鍋台の校舎で学ぶ者は、自分だけのために学ぶのではなく、他のために学ぶのだとの決意がこもっています。私たちの母校の地である真鍋(川学べ)は、土中生・一高生にとって、まことにふさわしい地名なのだと思います。

魂の琴線

「沃野一望」の校歌。単純直裁で、決して高邁な哲学や処世訓を語るものではありませんが、若者の心情を素直に表現し、青年の心意気を歌い上げて、魂の琴線にふれるものがあります。

曲も簡潔。歌詞が七・五調のリズムで統一されているのを受けて、メロディーも一節ずつ同じリズムで統一。使用されている音域は、高すぎず、低すぎず、広すぎず、狭すぎず。拍子は四分の二拍子。

「イツチ・ニ、イツチ・ニ、…」と行進をする時と同じノリになるため、日本人にはすぐなじめる拍子。また日本人がノリやすい符点のリズム(軍歌の特徴)に乗って曲が流れるため、歌いやすく、大きな声で堂々と歌うことができます(曲の解説は守谷高校音楽科郷恵子先生のご教示をいただきました)。

校歌作詞者 堀越 晋氏



東北帝国大学医学専門部卒業記念アルバム(1916)の堀越晋氏と、同氏の写真付き位牌(この2枚の写真は、現越堀越晋一ご夫妻(左)と堀越晋一ご夫妻(右)の厚意により掲載することができた)

明治27(1894)年6月26日生まれ。石岡市井関80番地、堀越誠太郎氏の長男。明治40(1907)年4月9日旧制茨城県立土浦中学校第1学年に入学。明治45(1912)年3月27日同校第5学年卒業。

東北帝国大学医学専門部に進学、卒業後、宇都宮の病院に勤務。

大正6(1917)年8月14日病死。

中学4年生(16才)の7月、夏休みの課題として全生徒に出された作品募集に応じ当選。明治44(1911)年1月1日「校歌」制定。

長男は堀越晋一氏(東京在住)。

校歌作曲者 尾崎 楠馬 先生



静岡県立見付中学校の校長のとき

明治11(1878)年10月1日生まれ。本籍地高知県安芸郡赤野村桜浜74番地。

高知県師範学校卒業後、東京高等師範学校を明治40(1907)年3月に卒業。

明治40(1907)年4月5日、本校教諭に任ぜられて国語を担当され、当時、尾崎流の朗読が全校を風靡した。明治44(1911)年7月31日まで勤務。

その後、東京青山師範学校、浜松師範学校をへて静岡県立見付中学校初代校長となる。

土中時代からの盟友小田原勇教頭とともに、草創期の見付中学校の基礎固めに尽力。運動場づくりをはじめ、勤労・鍛錬の労作教育を通しての人間教育は高い評価を受け、現在も「ド力中精神」として、磐田南高校に息づいている。昭和29(1954)年2月5日、東大病院にて病死。

(高21回卒 松井泰寿)

平成25年度第1回旧本館活用委員会開催

本年度第1回本委員会(上木幹夫委員長・高4回卒)が、去る4月23日(火)午前10時より、豊崎校長(高25回卒)はじめ関係者及び委員各位の出席を得て開催されました。

小泉副委員長(高19回卒)より、「昨年度の旧本館来館者が297名」「現本校職員の中で同窓会員は20名」などについて報告されるとともに、今年度は「旧本館を一般向け文化講座等に積極的に開放する」「『アカンサス』の発刊を年12回とする」などが提案されました。審議の結果、すべて原案通り承認されました。